

1. 研究開始当初の背景

宣教師はいつの時代においても、言語の壁を乗り越え信者を獲得しようと尽力する。そこには、単なる外国語との接触という域に留まらない、異文化コミュニケーションが生じる。

筆者は先に『異文化コミュニケーションの史的研究ーヴィンチェンツォ・チマッティと日本語ー』が平成20年度科研費若手研究(B) (課題番号:20720143) に採択され、1926年に来日したサレジオ会士ヴィンチェンツォ・チマッティの日本語習得の過程とその結果について調査研究を進めた。その中で、「今後の異文化コミュニケーション研究の一分野として、歴史という素材にアプローチしなければならない」[石井・久米・遠山編著(2001:160)]という指摘に大いに刺激を受け、16世紀に来日したアレッサンドロ・ヴァリニャーノも研究対象とする着想に至った。「歴史という素材」に接近し異文化コミュニケーション研究に通時的視点を取り入れることができるだけでなく、イタリアというチマッティと共通のバックグラウンドを持つ点でもヴァリニャーノは比較対照に最適と判断した。これが研究開始当初の背景であり、基本構想である。

2. 研究の目的

ヴァリニャーノとチマッティの略歴は下記の通りである。

イエズス会士 ヴァリニャーノ
Alessandro Valignano (1539~1606)
東インド管区巡察使として 1579 年から 1582 年にかけて初来日。その後 2 度来日。コレジオ・セミナリオの設立など布教体制を整え、天正遣欧使節を実施するなどした。活版印刷機を日本に初めてもたらしキリシタン版を開版したことでも知られる。

サレジオ会士 チマッティ
Vincenzo Cimatti (1879~1965)
王立トリノ大学で農学博士号・教育学博士号を取得後、1926 年に宣教師団長として来日。九州地方において宣教活動に従事した。1937 年サレジオ会日本管区初代管区長となる。多くの日本人司祭や修道士を育成した。日本での宣教活動や日伊文化交流に尽くした功績に対し、イタリア共和国功労勲章と勲三等瑞宝章を受章した。

ヴァリニャーノとチマッティの比較は、両修道会の日本での布教スタンスの差異、時代背景の差異等があり多角的な視点が必要と

なるが、主眼はあくまで日本語教育史・異文化コミュニケーション史という広義言語学的観点からの考察に置いた。「イエズス会士ヴァリニャーノとサレジオ会士チマッティの比較対照をもとにした、日本語習得及び異文化コミュニケーションの通時的分析・記述」を目的とし、調査開始時には下記の目標を掲げた。

- ① ヴァリニャーノの日本語学習に関する文献を収集し、その学習の足跡を辿り記述すること。
- ② ヴァリニャーノとチマッティの日本語学習の過程とその結果を比較対照し、異文化コミュニケーション史研究として、母語イタリア語の影響に着目しつつ、両宣教師の努力・格闘・苦悩の過程を明らかにすること。

3. 研究の方法

研究の具体的方法については、下記の年度計画を立てた。

- 平成 22 年度：
ヴァリニャーノ日本語学習関係文献収集及び調査
平成 23 年度：
イタリア語話者の第二言語習得・日本語習得に関する文献収集及び検討
平成 24 年度：
ヴァリニャーノ日本語学習関係文献とチマッティ日本語学習関係文献の比較対照分析及び記述

ヴァリニャーノについては「イエズス会聖三木図書館(東京都千代田区麹町6-5-1)」における文献調査、チマッティについては「チマッティ資料館(東京都調布市富士見町3-21-12 サレジオ神学院内)」における文献調査を中心とし、チマッティ資料館館長ガエタノ・コンプリ神父の助言を適宜仰ぎながら研究を進めた。また、平成 23 年度よりキリシタン学研究の中心的役割を担う組織である「キリシタン文化研究会」に入会することで他の研究者より有益な助言を得ることができた。

4. 研究成果

本研究は、分析・論証を通して最終的な結論を導き出す性質のものではなく、分析の中での発見・理解を記述し蓄積していくものである。従って、ここには資料分析の中にあつた発見・理解のうち重要なものを、必要に応

じて関連資料を引用しつつ、挙げることにする。

①両者のイタリア籍について

研究開始当時は、同じイタリア籍の宣教師を比較対照するため「イタリア語話者の第二言語習得・日本語習得に関する文献収集及び検討」を志向していたが、同じイタリア籍であっても時代の違いがそのまま大きくイタリア国およびイタリア語の違いという背景的情報の重要な差異に繋がることから研究目標を若干修正し「イタリア人宣教師ヴァリニャーノとチマッティの日本語観に関する文献収集及び検討」へと変更した。

②両者の教育者としての側面

イエズス会とサレジオ会は、前者がアカデミック、後者がプラクティカル（職業訓練中心）という基本的な方向性における違いが見受けられるが、創立以来教育を大きな柱としているところが共通している。神学を志す者には当然さまざまなバックグラウンドがあるが、ヴァリニャーノとチマッティは共に宣教師である以前に教師であった。ヴァリニャーノは1572年9月1日から約1年間マチュエラータ学院の院長であったし、チマッティも来日前はヴァルサリチェ学院の師範学校校長や支部院長を歴任したことが知られている。教えることのプロフェッショナルであったということは、すなわち学ぶことの重要性を深く理解していたとも考えることができる。チマッティの学ぶ意欲が、王立トリノ大学での農学博士号・教育学博士号取得のみならず、王立パルマ音楽大学からのディプロマ取得にも繋がった。ヴァリニャーノがコレジオ・セミナリオ・ノビシヤドという教育のための「システム」づくりに邁進したのも、その「教える」ことの必要性和「学ぶ」ことの重要性の自覚があったためと考えられる。

③ヴァリニャーノと日本

高い志、すなわちモチベーションは、宣教師となる前提条件である。とは言え、宣教師と宣教地との相性は当然ある。

ヴァリニャーノについては、先に日本布教長として赴任していたイエズス会士フランシスコ・カブラル（Francisco Cabral、1533-1609）が日本人に対し下記のような観察を呈している。松田（1991）より引用する。

私は、日本人ほど傲慢で、貪慾で、不安定で、偽装的な国民を見たことがない。彼らが（修道会に入って）共同の、そして従順な生活ができるとすれば、それは他に生活手段がない場合においてのみである。ひと

たび生計がたつようになると、たちまち彼らは、まるで主人のように振舞う。日本人のもとでは、誰にも心の中を打ち明けず、読みとられぬようにすることは、名誉なこと、賢明なことと見なされている。彼らは子供の時から、そのように奨励され、打ち明けず、偽善的であるように教育されるのである。

[松田（1991:104）]

日本に関する情報としてはあまりにもネガティブなものである。カブラルと対立する形で、日本人の能力を評価し日本を肯定的に捉えたヴァリニャーノは親日派と呼べるが、彼とて日本人の短所は短所として以下のように直言的に指摘していることを忘れるべきではない。松田（1973）より引用する。

彼等に見受けられる第一の悪は色欲上の罪に耽ることであり、これは異教徒には常に見出されるものである。（中略）この国民の第二の悪い点は、その主君に対して、ほとんど忠誠心を欠いていることである。

（中略）日本人の第三の悪は、異教徒の間には常に一般的なものであるが、彼等は偽りの教義の中で生活し、欺瞞と虚構に満ちており、嘘を言ったり陰険に偽り装うことを怪しまないことである。（中略）第四の性格は、はなはだ残忍に、軽々しく人間を殺すことである。（中略）日本人の第五の悪は、飲酒と、祝祭、饗宴に耽溺することである。

[松田（1973:16-19）]

④チマッティと日本

チマッティが初めて訪日したサレジオ会士という印象を与える文献が多いが、クレバコーレ（1975）の記述から、チマッティを団長とする宣教師団が派遣される直前の1924年に、サレジオ会支那（現中国）管区長イグナチオ・カナゼイ（Ignazio Canazei、1883-1946）が日本視察に訪れていたことが判明した。これは史実として重要である。そのカナゼイは日本について下記のように述べている。クレバコーレ（1975）より引用する。

日本の生活水準は支那よりもはるかに高く、過去において支那から多くの文化を取り入れたにもかかわらず、言語、風俗、政治などの面において著しく異なっています。……この国民は一般にもっと礼節で、支那では至る所に盗みや掠奪があるのにたいし、日本には秩序と規律があります。日本の警察に西洋人は多く学ぶところがあると思います。また、社会福祉は比較的

普及し、物乞いなどは見当たりません。…
…しかし、九州は他の地方にくらべ、いくら
か開発は遅れ、貧しい地域です。
[クレバコーレ (1975:302)]

先述のヴァリニャーノの場合と異なり、日本に関する情報としては非常にポジティブなものとなっている。チマッティは先に中国に赴任した教え子に対しても羨望の手紙を送っており、布教の困難さを承知しながらも東アジアを宣教地として強く希望していた。その点で、初めより日本とは相性の良さ (compatibility/congeniality) があつた。

⑤ヴァリニャーノと日本語

Moran (1993:184) によれば、ヴァリニャーノが 1592 年の段階で「they all know the language very well, and can preach and write in it」と日本語力を高評価しているイエズス会士には、ジョアン・ロドリゲス (João Rodrigues Tçuzu, 1561-1633) に加え、ピエロ・パウロ・ナヴァルロ (Pietro Paolo Navarro, 1560-1622) とマテウス・デ・コーロス (Matheus de Couros, 1569-1632) がいる。これらのイエズス会士が日本語の習得に積極的に取り組み躍進を成し遂げたのも、ヴァリニャーノの敷いた路線に乗ってこそである。

ヴァリニャーノ本人についての日本語力に関する記録は少ないが、Moran (1993) には、文献調査に基づく下記のような貴重な指摘があつた。引用中の「the Visitor」はヴァリニャーノを指す。

The catalogues do not comment on the Visitor's own command of the language, but in 1599 it seemed advisable for Valignano and Bishop Cerqueira to withdraw from Nagasaki to Amakusa, and there, with Francisco Rodrigues (chief editor of the Vocabulario da Lingoa de Iapam) as their teacher, they both applied themselves to learning Japanese, studying harder, according to Valignano, than they had ever done in their days as students of philosophy or theology, and making some progress in it. The bishop was in his late forties at that time, and Valignano was sixty. In February 1602 the Visitor has been in Arima for four months, and is again spending part of his time studying Japanese. He is in good health, though in his sixty-fourth year, and he believes he is making progress in the language. The Visitor, like all the Jesuit superiors up to and including

Gómez, did not progress very far.
[Moran (1993:181-182)]

⑥チマッティと日本語

チマッティは、布教のために日本語の学習に励んだ。しかしながら、非効率的な学習環境により、その高い志にもかかわらず日本語の習得は高い水準には達しなかった。当然ながら個人的な能力の問題もあるが、時期的には、外国人の視点からの日本語研究も日本国内で行われ、また、イタリア国内でも当時日本語教育が行われていた事実もあることから、学習に必要な情報及び教材の欠如・不足がその主たる要因であると、平成 20 年度科研費若手研究 (B) 採択課題『異文化コミュニケーションの史的研究—ヴィンチェンツォ・チマッティと日本語—』(課題番号: 20720143) で結論づけた。

来日初期のチマッティの苦難の様子も下記の書簡からうかがえる。コンプリ編訳 (2003) より引用する。

一番大きな犠牲は、否応なしに話せない子どもにも返ったことである。皆、ある程度年を取っていて、勉強の魅力というよりも、義務感や意志によってのみ支えられている。何も理解できず、何もできない状態である。聖フランシスコ・ザビエルの言葉を借りると、まるで大理石でできた像のようだ。どうか、主が助けをくださいますように！このような犠牲は、あまり人々に理解されていない。本には、宣教生活の素晴らしさや冒険のみが強調されているが、一番辛いのは、切り離されている状態にあつて、何もできず、屈辱的な、気力を消耗する生活を送っていることである。

(1926 年 2 月 26 日付日誌)

[コンプリ編訳 (2003:80-81)]

⑦アコモダチオ

「アコモダチオ *accommodatio*」を「日本キリスト教歴史大事典」は以下のように説明している。

アコモダチオ *accommodatio*

布教の適応方針。20 世紀初期以来提唱された宣教学の視点から重視されている分野で、諸国民の人種、言語、民族、文化、社会、道徳、心理、宗教などの特殊性を考慮し、人間性という共通の遺産を反映する各文化の健全で有効かつ優れた価値をすべて認め、保存し、高めて利用しよう、できうる限り最大の理解をもって福音を宣布することである。

要するに、アコモダチオとは、最も土着的

なものへの尊敬と評価である。(以下略)
[「キリスト教歴史大事典」, p. 35]

アコモダチオは一般に「適応主義」や「順応主義」と和訳されることが多い。本研究でも当初は「適応主義」を採用していたが、和訳によるニュアンスの違いを避けるためにアコモダチオというカナ表記を採用するに至った。アコモダチオは布教行為におけるスタンスであり、ヴァリニャーノはこのスタンスの代表という扱いを受けることが多い。しかし、本研究ではアコモダチオを異文化に対するアプローチの一手法として捉えるべきと主張した。イエズス会士がより実際的で効率的な布教を日本社会で展開するために適用したコミュニケーションの方式がアコモダチオなのである。

では、そのアコモダチオというコミュニケーション方式(手法)の良き使い手たるヴァリニャーノは他とどのように異なっていたのであろうか。本研究では、この点を遠山(1988, 1991, 2007)の提唱したコミュニケーション型の分類を用いて考察した。

ヴァリニャーノはその出自から「片立志向統合」型コミュニケーションと仮定し、一方宣教の対象である日本人は「両立志向同化」型コミュニケーションであると仮定した。なお、これは遠山の論考における日本人の扱いと軌を一にしている。

遠山によれば、不承不承の同化を見せる「両立志向同化」型と「片立志向」型間のインターモーダル・コミュニケーションには誤解が生じやすい。先に引用したイエズス会士カブラルの日本人評にある「日本人のもとでは、誰にも心の中を打ち明けず、読みとられぬようにすることは、名誉なこと、賢明なことと見なされている。彼らは子供の時から、そのように奨励され、打ち明けず、偽善的であるように教育されるのである」というような記述はまさにそのような誤解の表れと言えよう。勿論全てが誤解ではなからうが、「片立志向」型コミュニケーションが「両立志向同化」型コミュニケーションに対して抱きやすい典型的印象なのである。

このようなインターモーダル・コミュニケーション・ギャップの解消にヴァリニャーノが採ったのが、自身の「片立志向」型から日本人のコミュニケーション文化たる「両立志向」型への歩み寄りであった。相手を変えることは困難であれば、自分を変える。それが彼の「アコモダチオ」であった。もちろん、信者獲得という現実的なノルマがある中で、不承不承同化する「両立志向同化」型への転向は必要に迫られてのことであったかも知れない。しかし、先の仮定に戻り、ヴァリニャーノをその出自から「片立志向統合」型コミュニケーションと考えたならば、自身のコミ

ュニケーション文化が「統合」の概念を内包するだけに、「両立志向統合」型コミュニケーションに比較的スムーズに移行できたとの推論が成り立つ。

「両立志向統合」型コミュニケーションは、基本的には出てきた意見はできる限り採用し、些細な意見、情報にも等価値的に時間を割き、相手への気配り、配慮を怠らないと遠山は説明する。ヴァリニャーノ時代の「アコモダチオ」には「キリシタン文学における仏教用語の使用」、「茶道の重視」、「教会の建築・構造の一部の日本化」、「典礼や秘跡における日本的要素の採用」などが含まれるが、キリスト教に改宗しないものを異教徒(heathen)と呼ぶカトリックからすれば、本部の方針に抵触しかねない大胆な歩み寄りである。

つまり、「片立志向統合」型コミュニケーションから「両立志向同化」型及び「両立志向統合」型コミュニケーションへ自己転換できたことが、ヴァリニャーノの成功であり、ヴァリニャーノの功績を生み出した要因と考えられるのである。

引用文献(引用順)

石井敏・久米昭元・遠山淳編著(2001), 「異文化コミュニケーションの理論」, 有斐閣.

松田毅一(1991), 「南蛮のバテレン」, 朝文社.

松田毅一他訳(1973), 「日本巡察記」, 平凡社.

クレバコーレ, A. (1975), 「チマッティ神父の生涯 上巻」, ドン・ボスコ社.

Moran, J. F. (1993), 「The Japanese and the Jesuits: Alessandro Valignano in sixteenth-century Japan」, Routledge.

コンプリ編訳(2003), 「チマッティ神父の手紙1 日本との出会い」, ドン・ボスコ社.

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編(1988), 「日本キリスト教歴史大事典」, 教文館.

遠山淳(1988), 文化の生成過程: その2 - 情報淘汰とコミュニケーション型-, 社会学論集(桃山学院大学), 21-2, 51-71.

遠山淳 (1991), 日本文化の安定と変化 - 日本的コミュニケーションにおける対立回避の仕組み-, 国際文化論集 (桃山学院大学), 5, 143-159.

遠山淳 (2007), 日本的コミュニケーション再考 - インターモーダル・コミュニケーションをめぐる -, 国際文化論集 (桃山学院大学), 37, 277-292.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 村田昌巳、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (I) 研究序説、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第 38 号、2012、7-11.

② 村田昌巳、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (II) 日本派遣の背景、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第 39 号、2012、1-8.

③ 村田昌巳、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (III) ヴァリニャーノと日本語、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第 40 号、2013、17-24.

平成 25 年度内に下記論文発表予定

[投稿済・現在校閲審査中]

④ 村田昌巳、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (IV) コミュニケーション論的観点から、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第 41 号、2013.

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田昌巳 (MURATA MASAMI)
サレジオ工業高等専門学校・一般教育科・
准教授

研究者番号：40390471

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし